一隅を照らす人々

シリーズ 第2回

「ナニワの激オコおばちゃん」小松敏行さん

「一隅を照らす、これ即ち国宝なり」
和の国・日本の強みは、かつて最澄が言ったという
この言葉にこそ表れている。
独裁者のリーダーシップではなく、
それぞれがそれぞれの立場で精いっぱい努力する。
日本という国はそんな人々が寄り集まってできてきた。
「今の政治はダメだ、教育はダメだ」と言うだけではなく、
昔の寺子屋のように、自分ができるところでできることをする。
日本が明るく、希望のある国になるために、
一隅を照らす活動をされている読者の方にお話を伺います。

大阪のおばちゃんが世の中にモノ申す!?

「世の中、おかしなことだらけや」とつぶやく大阪弁のおばちゃん。時にユーモラスに、時に辛辣な言葉を紡ぎながら、その「おかしなこと」の核心に切り込んでいく。「ナニワの激オコおばちゃん」というブログである。

更新はほぼ毎日、アクセス数は1日当たり約1万もあり、ブログランキングでも常時5〜6位につけている人気の保守系ブログだ。テーマは

ナニワの激オコおばちゃん

こまつ・としゆき／(株)ロゴスラボ代表取締役、ブロガー
1956年大阪市生まれ。京都大学文学部卒業後、(株)博報堂入社。媒体・営業職を経て定年退職後、広告会社(株)ロゴスラボを設立。2017年、ブログ「ナニワの激オコおばちゃん」開設。「おばちゃん」のキャラクターによる独特の大阪弁で、ほぼ毎日執筆、発信中。高校、大学時代はラグビー部所属。
【ナニワの激オコおばちゃん】：https://naniwakawaraban.jp/

日本の安全保障から財政問題、コロナ対策、憲法改正や皇室について、果てはエネルギー問題までと多岐に渡る。おばちゃんにしてはものすごい知識量だが、我々日本人が〝言われてみれば「?」と思う〟ことをズケズケと暴いていく様は、おばちゃんならではの鋭い視点と言えなくもない。

ところが、じつはこのブログの執筆者は、〝おばちゃん〟ならぬ〝おじちゃん〟だったのである。今回の「一隅を照らす人々」の被取材者、小松敏行さんだ。「ナニワの激オコおばちゃん」は、小松さんが大手広告代理店を定年退職したあとに立ち上げた、おばちゃんのキャラクターを用いたブログだったのだ。

なぜ、こうしたブログを立ち上げたのか？　なぜ、おばちゃんキャラクターを使うことにしたのか？　本誌の読者でもある小松さんに、その活動への思いを聞いた。

保守思想への「覚醒」

――小松さんは定年まで博報堂にお勤めされていらしたんですね。大手広告代理店といえば、電通が「反日メディアの本丸」と目されるなど、保守思想とは相性が悪そうですが、実際のところはどうなんでしょう？

小松　広告代理店って、何か面白いことはないかとか、人とは違う変わったことがやりたいと思うような人が集まってくるところですが、じつは思想だとか政治の問題だとかには基本的に疎いんです。ただ、広告というのは多くの人に受け入れてもらわないといけないので、マスコミや世間のメインストリームに合わせていこうとする風潮はあります。

でもそれは思想と呼べるような代物ではなくて、単に一般受けする方向に合わせているだけ。実際は、保守がどうとか、リベラルがどう、グローバリストがどうなんて深く考えている人はほとんどいないんじゃないかと思います。社内で政治について論じている人は見たことがないし、僕も当時は政治には興味がなく、選挙にも関心はありませんでした。

――それは意外です。これだけ博識なブログを書かれているので、昔からお詳しかったのかと……。では何がきっかけとなって保守思想に行き着いたんですか？

小松　僕が会社を辞める5年ほど前、東日本大震災（2011年3月11日）のころを境にして、「今の日本は何かおかしいぞ」と感じることが増えていったんです。最も象徴的だったのは、あのころ尖閣諸島沖で中国漁船が日本の巡視船に体当たりした事件がありましたよね。当時、現役の海上保安官だった一色正春さんが証拠映像をリークして発覚した事件です（2010年11月4日）。

あのとき国はビデオを隠そうとしたし、船をぶつけた中国人船長も解放してしまい、その判断は沖縄の地裁に任せていた。それを知り、「どうしてそうなるの？」とびっくりしたんです。普通に考えれば国を売るようなとんでもない行為ですよね。

こういう「おかしいな」と思うできごとが重なって、手当たり次第調べるようになったんです。そうしたら自分では「覚醒」と言っているんですが、いつの間にか保守思想に行き着いていました。

ナニワの激オコおばちゃんはどうして生まれたのか？

――確かに中国漁船衝突事件は自分たちがいかに平和ボケかを突き付けられるようなショッキングなできごとでした。あれで目覚めた国民も多かったと思います。それが「ナニワの激オコおばちゃん」につながった。でもブログを開設した理由というのは何だったんでしょう？

小松　もともとずっと広告の仕事をしてきたということもあって、いろんなことを知るうちに、憲法

大阪 Hot Topics

大阪の感染状況を説明する吉村洋文知事
写真提供：共同通信社

大阪・コロナ感染者数急増

コロナ騒動についても、お上やマスコミの言うことを鵜呑みにしてはダメとブログで警鐘を鳴らしている小松さん。例えば本稿を執筆中の現在、大阪の感染者急増が報道されているが、その裏には駅前で無料のPCR検査キットを配るなど、やたらと検査数が増えている背景があるのだとか。結果、数字上、陽性率は下がったが、陽性者数は激増。小松さんいわく「コロナは茶番」。PCR検査やワクチンは「おかしいことだらけ」という。興味のある方はぜひブログをご一読あれ。

改正問題について新聞に意見広告を出したいと考えるようになったんです。意見広告というのは、例えば新聞の全面広告で「憲法を改正しよう」などと意見を訴えるということです。

新聞で15段の全面広告を出そうと思ったら何千万円とかかりますから、その意見広告を出すにあたっては、クラウドファンドで資金を募ろうと思ったんですね。そのためにはコアなメッセージを伝えていく必要がある。そのツールとしてブログを立ち上げました。残念ながら、当時は読者もなかなか増えずに資金も必要額まで到達せず、失敗に終わってしまったんですが、ブログ自体はその後も続けていくことにしたんです。

――なるほど。それにしてもなぜ大阪のおばちゃんキャラで？

小松　意見広告というのは何らかの主張をするものなので、やっぱり堅いものが多いんです。僕はずっと広告会社で「いかに人々に受け入れられる広告ができるか」ということを考えてきたので、従来の意見広告とは一線を画すものにしたかったんですね。よくできたイラストに、よく練られた文章。憲法の問題に関心のない人にも興味を持ってもらえる内容にしたかった。

ただ、専門家でもない人間の言葉に耳を傾けてくれる人は、そうはいません。そこで大阪弁で書くことを思い付いたんです。僕は大阪生まれの大阪育ち、大阪弁には絶対の自信があります（笑）。それに大阪弁というのは、ややこしい話を「ひと言で言ったら何なん？」と、簡単に伝えるのに向いている。それは広告が得意とすることでもあります。CMは15秒の世界ですからね。

でも、そこで「ちょっと待てよ」と。大阪弁って、男が話すとなんだか柄が悪いんですよ。そこで、おばちゃんだったらもう少し柔らかくなるだろうというので考え出したのが、このキャラクターだったんです。

――おばちゃんキャラだと、難しい話でもとっつきやすい気がしますよね。すごく秀逸なアイデアだと思います。そんなところにも広告的な手法が活かされていたんですね。

小松　そうこうしているうちに読者数が増えていくようになりました。

大阪都構想とフジ住宅裁判どっちもヘン！

――ブログを運営されていて、それがきっかけで世の中が変わったという手応えのようなものを感じたことはありますか？

小松　1つは大阪都構想の反対運動ですね。僕はあれがインチキだと思っていたので、またまた新聞に意見広告を出そうとしたんですね。そうしたら新聞社から断られてしまったんです。「ここの表現を変えてほしい」と言われたのですが、「オイオイ、その表現抜いたらこの企画が成り立てへんやろ」という話で、新聞側から掲載NGをくらってしまった。このあたりがマスコミの限界かと痛感しました。

その経緯はブログにもいろいろ書いたんですが、すると読者の1人に「自分が持っている看板スペースを自由に使ってくれ」という人が現れたんです。阪神高速の乗り口のすぐそばという面白い場所で。

それで看板を作るために資金を募ったら今度はすぐに集まった。それによって住民投票の2週間ほど前から、大阪市内に「都構想反対」の看板を掲げることができました。それがどこまで影響したかは分かりませんが、その後の住民投票で大阪都

大阪 Hot Topics

大阪都構想

大阪維新の会の橋下徹氏が提唱したもので、大阪の行政制度を東京都が採用する「都区制度」に変更しようという構想。大阪市を廃止し、複数の特別区に分割。そして大阪市の持つ財源・行政権のうち、大型のインフラ整備など広域に渡るものを府に移し、特別区は教育や福祉など身近な行政に集中して二重行政を防ごうとするもの。だが「政治的思惑が優先されている」との批判の声も上がっていた。2020年11月1日の住民投票では賛成67万5829票（49.4%）、反対69万2996票（50.6%）で僅差で否決。

小松さんが掲げた都構想反対の看板

構想は棄却。本当に僅差だったので、看板が少しでも役に立ったならよかったなと。それが僕のブログのささやかな成功事例の1つです。

もう1つは、成功事例というわけではないのですが、フジ住宅裁判についてです。この裁判がいかにエゲつないかということも常々ブログに書いていまして、最近それを見た我那覇真子（がなはまさこ）さんからご自身のYouTube番組の生配信に呼んでいただきました。自分が「おかしいぞ」と思うことを人々にも知ってもらいたいという想いでブログを書いているので、生配信に呼ばれるというのは、それだけ大勢の人の目に留まっているのかなと嬉しく思いました。

――その生配信で初めて顔出しをされて、「おばちゃんがじつはおじちゃんだった！」と読者にバレてしまったんですよね（笑）。

小松　もともとブログのプロフィール欄には「ホンマにおばちゃんかどうかはヒ・ミ・ツ」と書いていましたから、読者にも温かく受け入れてもらいました（笑）。

「普通の国になってほしい」

――小松さんが「ナニワの激オコおばちゃん」で一番訴えたいこと、あるいは「日本にこうなってほしい」という想いとは何でしょう？

小松　そんな偉そうなことを言える人間ではないんですが、「普通の国になってほしいな」というのがあります。さっきの憲法改正の意見広告じゃありませんが、おかしいじゃないですか。自分とこの庭に入ってきた泥棒に「出ていけ」と言えない国なんて。それってどう考えてもおかしいですよ。

だから、普通の国になって、ちゃんと軍も持ってほしいと思います。日本で「軍を持つ」なんて言ったら、一般には危険思想の持ち主扱いをされるかもしれませんが、そもそもそれがおかしいんです。軍を持たない国なんて滅ぼされるだけですから。今、尖閣が大変なことになっていますが、それをどうにかしようと思ったら、普通の国に戻るしかないですよね。

それから、先ほどのフジ住宅裁判の話で言えば、裁判官が裁判に入る前に「ブルーリボンバッジを外さないと開廷しない」と言ったんですよ。ブルーリボンバッジというのは、北朝鮮に拉致された日本人の救済を願う人が付けるものですよ。昔、小泉純一郎首相もブルーリボンバッジを胸に付けて日朝首脳会談に臨みました。それに対して、日本人の裁判官がなぜバッジを外せと言うのか。非常におかしな話ですよ。

――本当にそうですね。多岐に渡るトピックに大阪弁で軽快に突っ込む「ナニワの激オコおばちゃん」は、情報の詳しさで言っても貴重なブログだと思います。

小松　僕はバブルを謳歌した世代なので、今の若い世代は閉塞感を感じているのではないかと心配になるんです。僕たちの若いころは、給料は当たり前に上がっていくものだったし、将来は必ずよくなるという希望があった。でも、今の若い世代は「将来どうなるかわからない」という不安のほうが大きいでしょう？

その不安を取り除くことはなかなか難しいけれども、若い世代のためにも、日本の将来は明るいものにしなくてはいけない。ブログを続けている一番大きなモチベーションがそれです。ですから、僕はこれからも自分が「おかしい」と思った話をコツコツと広めて、日本を明るくするために頑張っていきたいと思っています。

大阪 Hot Topics

フジ住宅裁判

大阪・岸和田に本社を置く不動産会社フジ住宅（東証一部上場）に対し、同社に20年以上勤める在日韓国人女性が「特定民族の差別を含む資料を配布され精神的苦痛を受けた」として3,300万円の損害賠償を求めた訴訟。同社では従業員に向けさまざまな書籍・資料を紹介しており、そのうちの1つの資料のコメント欄に無関係の第三者の発言で差別的な文言が混じっていた。裁判ではブルーリボンバッジの着用が禁じられたほか、原告側弁護士が「『日本はよい国だ』と言えばそれはヘイト発言だ」と述べるなど物議を醸した。2020年7月の一審判決ではフジ住宅側が110万円の賠償金支払いを命じられたが、現在控訴審中。

我那覇真子チャンネル（YouTube）
「4/20 生配信 日の丸バッチまで!?
ブルーリボンバッチ着用禁止 フジ住宅裁判を傍聴して」より

フジ住宅裁判控訴審第２回期日を報道する「我那覇真子チャンネル」に出演する小松さん